

「家族の諸相」の特集にあたって

編集部

近年、中国では、「家族」が大きく変化している。初代の一人っ子世代（一九八〇～九〇年代出生）が結婚、出産、育児の適齢期に入り、親は定年を迎えている。三十年に及ぶ「一人っ子政策」は、「四・二・一」とよばれる、一人っ子どうしの夫婦が一人の子供を養育し、双方の両親四人を扶養するという家族構成をうみだし、一人っ子世代は人的・経済的・精神的に大きな負担に直面している。「四・二・一」という形態は、従来の、親と息子という父系に基づく「養兒防老」（息子を養って老後の世話をたのむ）や「反哺」（親は子を、子は親を相互に扶養する）型が、すでに、実質的には、夫方と妻方の親対息子と娘という、双方を一体化した双系的関係にあることを示している。

本特集で「家族」をとりあげたのは、社会主義化に続く驚異的な経済発展のもとで劇変する中国にあって、一人っ子政策や高齢化、未婚化・晩婚化が、「家族」やそれを構成する家族成員にどのように影響を及ぼし、何が変化して何が変化していないのか、本当に変化したといえるのか、

「家族」の変化から社会のゆくえをどのように捉えることができるのか、深考すべき時にあると感じたからである。そこで本特集では、家族研究という名のもとに、社会学（家族社会学）や文化人類学（社会人類学）、ジェンダー論などの諸分野から多様な研究成果を集めて「家族の諸相」を明らかにすることを試みた。そして、座談会では、社会学から麻国慶先生と首藤明和先生、文化人類学から周星先生と稲澤努先生にご参加いただき、長年のフィールドワークに基づく知見の報告と広範囲に及ぶ問題提起をふまえて、啓発に満ちた討論が展開された。

家族研究はこれまで、家族の内部構造に関する研究と、家族とそれを取り巻く集団と組織の關係の研究の二方向から行われてきた。中国の家族研究では、漢族社会の父系出自の性格が目ざされ、家長権的な家庭内秩序が指摘されるとともに、「宗族」（父系の系譜で繋がる集団）の組織性とその社会的機能が研究されている。近年、中国の家族研究は、かつてと比べて研究者が減少し、あまり活発ではな

いといわれているが、充実した研究成果は着実に刊行されており、本特集の編集にあたって、以下を参考にさせていただいた。首藤明和「現代中国家族の変化と展望」〔中国21〕Vol.40、二〇一四年）、首藤明和・王向華編『日本と中国の家族制度研究』（風響社、二〇一九年）、瀨川昌久『中国社会の人類学——親族・家族からのアプローチ』（世界思想社、二〇〇四年）、瀨川昌久・川口幸大編『宗族』と中国社会——その変貌と人類学的研究の現在（風響社、二〇一六年）、韓敏編『家族・民族・国家——東アジアの人類学的アプローチ』（風響社、二〇一九年）等。

最後に、新たなテーマである家族の個人化について、沈奕斐『誰在你家——中国〈個体家庭〉的選択』（上海三聯書店、二〇一九年）を簡単に紹介したい。本書は、上海在住の四六戸の「中産階層」（夫婦とも四〇代以下、どちらかが大卒以上、上海戸籍、親が地元を離れて子世代と同居）を対象としたインタビュー調査とその分析で、上海家族について次の特徴をあげる。一に、理想の家族構造は「両扇門一碗湯」（二つのドア、一杯のスープ）の距離で各々のプライベートを守りつつ、親が第二の「妻」となっていて家事と育児を担う。二に、夫方居住婚が消失しつつあり、二世代同居の場合は親が子世代に従う。三に、誰を「家族」と認識するのかについて、女性はある自分の両親と配偶者、子供とするが、男性はこれに自分の兄弟を加え、親

世代は全ての親族を加える。四に、親族関係は高収入・高学歴・高地位のリーダー的人物のもとに展開される。五に、夫婦は各々が自分の両親に親孝行する責任をもち、妻は夫家には従属しない。六に、家長長制はすでに崩壊し、親世代は経済的優位を失って「時代遅れ」となり、子世代が親世代の権力を上回る。七に、夫婦関係では夫がなお主導権をもつが、家事分担には男女のバランスが求められている、とする。

近代化や都市化の進展に伴って、中国では個人の権利意識が向上し、家族主義が徐々に弱体化しつつあるが、欧米のような個人主義という文化がまだ形成されていない。沈著作が指摘した、一人っ子世代の女性の経済的地位の上昇により、家庭内の権力構造が変化しつつある現在、義理の親孝行のジレンマという問題提起は興味深い。少子高齢化が急速に進む中国において、親密圏に閉ざされた老親の扶養は徐々に社会化され、住み慣れたコミュニティでケアを受けたり、国家福祉で賄えたりする方向に変化していく可能性がある。しかし、個人の選択自由度が向上し、社会の「個人化」が進んでいると言われても、伝統的な家族という絆は強固なものとして根付いており（「血濃于水」）、家族は依然として個人の最後の砦である。中国の家族は常に「伝統性」と「現代性」の駆け引きの中で変化している。

（松岡正子・唐燕霞）